

啓蟄 春の陽気に浮かれた妄想男

〒768-0011

春の風が快い季節となりました。お変わりございませんか？
春先ともなると変質者や露出者が出没したとの不審者情報が
多く寄せられる中、この妄想男がまたもや動きだしました。

観音寺市出作町 603-3

電話 0875-25-6883

編集発行人 木下俊明

「さや侍・川上道大」である。実に7ヵ月ぶりの悪質記事だ。相手が挑んでくれば断固反撃である。昨年四国タイムズ8月号に「原告木下から脅迫ともとれる嫌がらせを1年半余りも本紙川上は受け続けている」と泣き言の記事以後、原告からの想定外の痛烈な反論、反撃に息切れ、ネタ切れしたのか音無しであった。さて、四国タイムズ今(3)月号にはこんな馬鹿げた記事があった。「さて山口組の厄病神の話、倭和会・飯田倫功会長と四国時報の木下俊明編集長が組んで、当時の盛力会の乗っ取りを企てたことを、司忍六代目は御存知でしょうか」とある。こんな荒唐無稽な記事を書く川上は、やはり異常な精神状態と推認できる。今回で3度目となる掲載写真も倭和会発足前の盛力会時代に盛力健児会長が帰郷した際の会長秘書(左からN氏、T氏、T氏)とのショットである。付け加えておろが、この3名は盛力会解散後、飯田若頭が倭和会会長として直参昇格したのと同時に倭和会直参に直ったが、倭和会発足後は一度も会っていない。何度も指摘しているが、毎回説明が異なるお粗末さだ。これまでの原告に対する中傷記事は裁判においても何一つ客観的且つ具体的な証拠を未だに示せないまま時間稼ぎする有り様だ。18回にも及んだ口頭弁論でも一貫性に欠ける主張を繰り返すばかりで何がしたいのかさっぱりである。その一例を記すと、昨年8月8日第13回口頭弁論の陳述で「証人・盛力健児こと平川徳盛の陳述書を準備できなかった理由は、平成25年8月6日付、期日変更申請書に記載のとおりであり、加えて盛力証人及び被告代理人が7月中も居なかったためである。平成25年9月中旬頃までには、盛力証人及び被告代理人が戻ってくるので、その後一週間程度で陳述書を作成する予定である。」ところが、この陳述は全くの虚偽であった。ちょうどこの時期、証人予定者である盛力氏は自伝著書発行の打合せ等で日本に居り、中国へ出張しているとの陳述は出入国(パスポート)証明を取れば、いとも簡単に大嘘が露見することさえも考えず、裁判所に幼稚な申し立てを行い、又、9月26日の公判には被告代理人である生田弁護士自身が弁護士資格停止期間中で、当日は無届けの不出廷をした。さらに、10月31日第15回口頭弁論で「証人予定者及び被告代理人の陳述書を提出する予定はない」と前言をいとも簡単に翻す始末だ。先月6日公判最終回第18回口頭弁論をもって、本名誉毀損事件は結審し、判決は今3月27日である。本裁判においても己の亡言、亡想を主張するばかりで、何一つとして原告の適示する内容(企業舎弟、建築代踏み倒し、ネズミ講)についての客観的且つ具体的証拠を示すことができなかったのである。7ヵ月も経った今になって、またもや悪質記事を再開したのは判決の結果を予測したのと、四国時報にボロクソに反撃されて沈黙したと世間に見られる故の体裁を繕うためと推論している。今更、川上がどのように報じよ

うが世間の目を誤魔化すことは不可能である。先月号あたりから、何と小泉元首相からエールが送られた等と訳の分からない記事を書き始めたり、警察庁の最高幹部が自分を称賛しているとか、山口組屈指の名門組織「若林組」に対する悪質な中傷記事しかり、そもそも己の自業自得から起こるべくして起こった襲撃事件なのだ。越えてはならない一線を越えれば任侠界、一般社会にかかわらず同じような目に遭うのは当然である。「武道家なので銃弾2発はかわしたが、後の1発は足に命中した」等と自慢げに書いておるが、自称武道家なら全部かわしてから自慢して欲しいものだ。思いっきり当たるとるがな。この負け犬、いつまで「やられたあ(泣)」「どつかれたあ(冷)」「撃たれたあ(痛)」とほざいているのか。毎回毎回書くことを川上自ら「オオカミオッサンのボディブロー」と呼んでいる。随分前から「らっきよ」みたいな汗かいて、そのボディブローとやらを打ち続けているそうだが、一向に効き目がない。「ラストサムライ」は体裁悪く今度は「Mr サムライ」だって。四国時報が名付け親の「さや侍」で十分だ。「四国讃岐に川上あり」とほざいておるが、四国讃岐に川上姓の方はなんぼでもおるがな(笑)今年「川上元年」だとか(爆笑)そんな年来る訳ないやろ。もうええわ。ようこれだけ自画自賛できるなあ。最近「どうであろう!」が決め台詞で自慢げに妄想記事に自己陶醉しておる。さて、話は変わるが「一寸先は闇」人生は運否天賦だ。自身の運命、宿命と受け止め「やれ裏切られた」とか「寝首をかかれた」等と女々しく怨言を記すことは、結果的に盛力健児氏の侠名を汚すことになるのだ。川上としてはお追従のつもりだろうが。山口組100年の歴史を振り返る時、間違いなく盛力氏の活躍は侠道に邁進する次世代の若い組員に延々と語り継がれるのだ。ド素人の川上如きが「理由なき除籍」だの「山口組綱領」だのああでもない、こうでもない山口組の決定事項や人事まで口を挟む資格はない。「堅気は堅気の分をわきまえんかい!」と言いたい。かつての盛力氏を幼き頃から知る者の一人として大変残念でならない。川上は盛力氏を巻き込まず己一人で喧嘩すべき。原告は任侠界とは無関係であり、日本最大の任侠団体「六代目山口組」に結び付けてくれるのは大変光栄だが、山口組には失礼で迷惑極まりない話である。四国タイムズの紙面ばかりで強がらず、報道人の基本である直撃取材にどうして行かないのか? 神戸市の山口組総本部へ何故行かないのか? 四国時報本部に何故来ないのか? 甚だ疑問だ。川上道大はミニコミ界の「佐村河内 守」だ。東京にゴーストライターもいると聞く。現代のベートーベンと云われた佐村河内氏。嘘に嘘を塗り重ねた音楽人生も化けの皮が剥がれた。作曲活動中に自ら壁に頭をガンッガンッと打ちつけるシーンがテレビで放映されたが、これもイメージ作りで演出であったと先日の記者会見で自ら認めた。あのシーンと川上とが被って見えて仕方がない。四国タイムズしか読んだ事のない読者は、「川上って人はヤクザ相手に根性あるなあ」と思う人も少なからず居たことだろう。これは、四国タイムズが四国時報を軽く見下し、虚偽の中傷報道を行ったことにより、これまでのイメージがビル破壊の如く崩れてしまったことを川上本人は気付いていながらも、強がり続けているのだろう。県議さんや市議さんも「あんな夢物語みたいなことばかり書いて、読む気もしません」と冷ややかだ。香川県庁で県議には正面から罵声を浴びせるそうだが、浜田知事に対しては背中に向かって叫んだそうだ(笑)そんな程度の川上よ! 書きたければ好きなだけ書け! 書いた分以上に恥をかいてもらうだけだ。